毎日新聞　2001年3月21日掲載

Digital Trend

デジタル時代を読む 2001

学校インターネット

全国の学校をネットワークでつなぎ、IT（情報技術）時代の教育モデルの創造を目指す「学校インターネット」事業が、広がりと深まりを見せている。総務省と文部科学省が共同で進めている事業で、全国の小中高校4万校の1割、約4000校を高速通信回線で結び、教育、学習のさまざまな可能性を探っている。

大阪国際会議場で2月22、23の両日に行われた中間発表会では17件の実践事例が報告され、全国各地から集まった教育者ら400人が熱心に見入った。

【佐藤　仁志】

茶道の所作で交流

テレビ電話システムで英国の小学校と

「お茶わんは両手で持ちます」

「ようかんはようじで切って食べます」

大阪府松原市立布忍（ぬのせ）小学校のランチルームに特設された和室で、着物姿の子供たちがビデオカメラに向かい、説明しながら、茶道の所作をする。説明をボランティアの協力者が英語に訳していく。

映像はイギリスのロビンフッド小学校に送られる。イギリスの小学生は画面を見ながら、真剣な表情で所作をまねている。その様子がまた布忍小の大画面に映し出される。時差は9時間。日本は夕方の6時、英国は朝の9時だ。

遠く離れた二つの小学校がネットを通じ、昨年3月に行った交流授業「ミレニアム・ティー・パーティー」は、お茶という共通のテーマで互いの文化を学ぶ企画だった。

体験授業

「もっと話をしたい」

大阪・布忍小の児童ら

英会話勉強に意欲

初めてテレビ電話システムを使った授業。目の前にいるイギリスの子供たち。参加した児童には新鮮な体験だった。

伊藤直貴くん(12)は「イギリスに送ったようかんを食べて『おいしい』と言ってくれて、とてもうれしかった。こんなに面白いとは思わなかった」と話す。前田紗恵子さん(12)は「日本人はみんな着物姿で、毎日お茶を飲んでいると思われないか、ちょっと心配。もっといっぱい交流をして分かり合いたい」という。交流授業の後、10人ほどが英会話教室に通い始めた。

この交流授業は中間発表会でも注目を集めた。報告した山本博貞教諭(41)は「事前準備を含め1年間で30人もの外国の方々に会い、その人の生き方や家族への思いに触れられた。子供たちには素晴らしい思い出になったはず。茶道を教えてくれたお年寄りや、在阪の外国人、通訳ボランティアのみなさんのおかげです」と感謝する。

授業の様子は布忍小のホームページ(http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/nunose/)に日英2カ国語で掲載されている。

布忍小の取り組みは、地域の人々や企業に支えられている。

大阪府では松原市の学校ネット参加に歩調を合わせ、1998年9月に「先進的教育情報環境整備推進協議会」を設立した。IT関連企業や地元企業など約50社が協賛金を出し、人材を出向させたり、資材を提供したりして、学校のIT教育を後押しした。布忍小も技術アドバイスを受けたり、機材の貸し出しを受けたりした。

「コネットプランにも企業の支援組織ができた。教育現場の情報化は、国や自治体の予算・人材だけでは限界があり、地域レベルで企業の支援組織をつくった意義は大きい」と坂元昂・文部科学省メディア教育開発センター所長は地域の協力を評価する。

同協議会の伊原和夫・副理事長(46)は「先生たちが授業の充実に専念できるようにするのが協議会の役目。学校現場の実情や先生たちの要望を企業に伝えたり、第一線のビジネスマンに社会の動きを先生たちに話してもらったりしている」と語る。